

『沈黙』論

—草稿の発見を踏まえて—

田中 葵

一・『沈黙』草稿の発見

遠藤周作は『沈黙』の草稿について、『沈黙の声』（平成四年七月十一日、カミュ文庫）で次のように語っていた。

それにしても残念なのは、『沈黙』の生原稿が消えてしまったことである。当時、軽井沢の私のところに遊びに来ていた学生が、もう必要ないと思っただけで、風呂の焚き付けにして燃やしてしまった。秘書が清書したほうは残っているのだが、私の書いた原稿はほとんど灰になってしまった……。

この言葉から、『沈黙』の遠藤周作の自筆草稿は残存しないと思われてきた。しかし近年、『沈黙』の草稿が新たに発見された。「読売新聞」は平成十六年五月十日、「遠藤周作『沈黙』の草

稿」の見出しで次のように報じた。

長崎県外海町の町立遠藤周作記念館で、作家・遠藤周作氏（1923—1996年）が、66年に発表した代表作「沈黙」の草稿が見つかった。遠藤氏はエッセーで、「沈黙」の草稿を「風呂の焚き付けにしまった」と書いていたため、研究者の間では「幻の草稿」とされていた。同館で16日から始まる企画展で展示される。

草稿はA3判400字詰め原稿用紙20枚分で、用紙の裏に鉛筆でびっしりと書き込まれている。「沈黙」の前半部分で全体の1割程度に当たると見られる。

遠藤氏の遺族が2000年の同館会館時に、蔵書など2万点を超える遺品を寄贈。同館の5月、企画展の準備のため遺品を整理して、草稿を発見し、研究を進めてきた。

「沈黙」は17世紀の日本を舞台に、ポルトガル人司祭ロドリゴが、信徒への厳しい迫害を前に、苦しみのすえに踏み絵を踏む物語。

藤田研究員によると、草稿ではキリストの顔に言及していないが、初版本では「力強く雄々しい」「優しい目」などの表現が加えられている。また、ロドリゴが迫害に遭った時、何度もキリストに励まされるくだりも加筆されている。藤田研究員は「『沈黙』の執筆過程がわかる重要な資料。遠藤氏の信仰の深さがうかがえる」と話している。

こうして遠藤周作自筆草稿が見つかったことにより、藤田尚子はその草稿を翻刻して『沈黙』草稿・翻刻』（平成十六年三月三十日、長崎文献社）を出版し、『沈黙』の草稿が一般に公開されることとなった。この草稿の発見が、『沈黙』という作品をさらに深く研究する契機ともなり、また新たな評価を生み出す可能性が出てきたのである。

本稿では、藤田尚子『沈黙』草稿・翻刻』収録の『沈黙』の草稿をもとに、初版本との異同を検討し、それを踏まえた上で新たな『沈黙』論の究明を試みたい。

その前に、〈草稿・翻刻〉資料の性質を確認しておく必要がある。『沈黙』は「まえがき」「I」「II」「III」「IV」「V」「VI」「VII」

「VIII」「IX」「切支丹屋敷役人日記」から成り立っている。藤田尚子『沈黙』草稿・翻刻』によると、『沈黙』の草稿は〈塩津秘書聖書草稿〉と〈遠藤周作自筆草稿〉を合わせて、「まえがき」「I」「II」「III」「IV」「V」「VI」「VII」「VIII」を確認することができる。つまり、「IX」と「切支丹屋敷役人日記」は存在しないのである。

藤田尚子は、『沈黙』の執筆手順を〈完成までの過程〉として次のように推測している。

推定される執筆手順

- (1) 遠藤周作が原稿用紙の裏側に鉛筆で執筆する。
- (2) 遠藤周作が(1)の上に赤ボールペンで訂正を行う。…資料A ←
- (3) 塩津秘書が(2)を清書する。 ←
- (4) 遠藤周作が(3)の上に訂正を行う。 ←
- (5) (4)を複写する。 ←

(6)(5)の上に、第三者が長崎方言を主とした語句の訂正を行う。
う。…資料B

←
(7)遠藤周作が朗読した声を吹き込んだテープなど(資料現存せず)

←
(8)ゲラ校正(二段階が現存する。(6)あるいは初版本本文と完全に一致するものは現存せず、昭和四十一年一月十日分の

加筆)…資料C

←
(9)初版本本文完成(昭和四十一年三月三十日発行)

藤田尚子は、〈資料AとBは本文を比較してみてもきわめて近い段階の本文と認められる。今回、資料Aの欠落を資料Bで補って一連の本文として提示することが妥当であると考えた〉と述べ、その二つを翻刻している。そのうち、〈遠藤周作自筆草稿〉は全三十二枚で、「I」の一部、「II」、「III」、「IV」の一部、さらに〈資料A・B〉のものとは〈別段階で執筆されたと推定される〉「I」の「セバスチャン・ロドリゴの書簡」の一部、「VIII」の「沈黙」踏み絵部分聖書」である。また、〈塩津登美子秘書聖

書草稿〉は全三七五枚となっている。なお、〈(第九章)、及び「切支丹屋敷役人日記」の草稿は現存しない〉としている。本稿では、この〈資料A〉と〈資料B〉を用いて、初版本の本文と比較し、検討する。また、この著書の中では紹介されていないが、遠藤周作記念館には『沈黙』の〈ゲラ刷り〉が全二七四枚所蔵されているという。藤田尚子はこの〈ゲラ刷り〉を〈清書草稿に近い内容のゲラ刷り〉と〈初版本本文に近い内容のゲラ刷り〉に大別して、以下のように説明している。

より清書草稿に近い内容のゲラ刷りは、全百四十三枚。

表紙には「沈黙」と印刷されている。このゲラ刷りでの章ごとの内訳は、3〜12頁が「序章」、13〜25頁が「I セバスチャン・ロドリゴの書簡」、26〜35頁が「II セバスチャン・ロドリゴの書簡」、36〜57頁が「III セバスチャン・ロドリゴの書簡」、58〜101頁が「IV セバスチャン・ロドリゴの書簡」、102〜130頁が「V」、131〜154頁「VI」、155〜196頁が「VII」、205〜221頁が「VIII」、222〜243頁が「IX」、244〜250頁が「切支丹屋敷役人日記」である。(中略)

より初版本本文に近い内容のゲラ刷りは、全百三十一枚。表紙には「沈黙」と印刷され、右余白に「遠藤氏控」と鉛筆で書かれている。章題は、「まえがき」から「切支丹

「屋敷役人日記」に至るまで初版本本文と一致し、該当する頁も同様である。「まえがき」から「IX」まで、同一人物によつて黒ペンで語句訂正が行われている。それぞれ一枚ずつ揃っているが、「VI」の157～158頁は2枚多く、ひとつは黒ペンでの語句訂正、ひとつは遠藤による鉛筆での加筆訂正と赤ボールペンでの語句訂正が認められる。「VIII」の225～226頁は一枚多く、遠藤による鉛筆での加筆訂正がある。

ここで注目しなければならないのは、ゲラ刷りでは「IX」及び「切支丹屋敷役人日記」が存在していることである。これらは、ロドリゴが踏み絵を踏んでからの展開である。この「IX」と「切支丹屋敷役人日記」がいつごろ執筆されたかを知る手立てではない。しかし（より清書草稿に近い内容のゲラ刷り）に「IX」と「切支丹屋敷役人日記」が存在していることから、遠藤周作が『沈黙』の原稿を新潮社に渡す際には、このふたつが既に書かれていたことが明示されている。（清書草稿に近い内容のゲラ刷り）は、欠落している頁もあり、（初版本本文に近い内容のゲラ刷り）と同様に加筆訂正がされているようである。藤田尚子は（二百七十四枚のゲラには、ホチキスで綴じたと考えられる跡が残されているが、ほとんどが分離された状態であるため一連の段階を見定めがたい）と注しており、その為（よ

り清書草稿に近い内容のゲラ刷り）と（より初版本本文に近い内容のゲラ刷り）に大別したとのことである。続いて（より清書草稿に近い内容のゲラ刷り）と初版本本文との頁数の違いを指摘しておきたい。その違いは次の表のようになる。

章	より清書草稿に近い内容のゲラ刷りでの頁数	初版本本文の頁数	頁数の違い
序章 まえがき	3～12	3～12	0
I	13～25	13～26	+1
II	26～35	27～36	0
III	36～57	37～58	0
IV	58～101	59～103	+1
V	102～130	104～133	+6
VI	131～154	134～158	+1
VII	155～196	159～202	+2
VIII	205～221	203～225	+6
IX	222～243	226～248	+1
切支丹屋敷役人日記	244～250	249～255	0

このように「V」と「VII」の頁数は六枚ずつ増えている。こ

こちら、へより清書草稿に近い内容のゲラ刷りから初版本が刊行されるまでに大幅な加筆が行われたことが推測できよう。

また、藤田尚子『沈黙』草稿・翻刻』掲載の〈付録〉には〈日記〉が含まれている。この〈日記〉について、藤田尚子は次のように説明している。

遠藤周作文学館所蔵の遠藤周作の日記の中から、『沈黙』執筆の時期を含む一冊（B5判）を翻刻したものである。

この日記は、一冊の大学ノートに昭和三十八年十月十日までを記しており、表紙には「Journal（日記）昭和39」と書き込まれている。

この日記の昭和四十一年の（一月十日）の記述で、〈新潮社小説の加筆すべき事項〉として（1）基督の顔（2）キチジロー（3）転んだ後の心理を詳しくとある。へより聖書草稿に近い内容のゲラ刷りから（初版本本文）の頁数が増えたのは、おそらくこの点についての加筆によるものであろう。

二、『沈黙』の構成と「まえがき」

佐伯彰一は新潮社文庫『沈黙』（昭和五十六年十月十五日発行）の「解説」で、『沈黙』の作品構成について次のように語っ

ている。

「まえがき」の後には、「セバスチャン・ロドリゴの書簡」四通がつづいて、読者をじかに主人公の内面に誘いこむ役割を果たしている。これが、小説の前半、四章をなし、あと、三人称描写の七章が来るといふ構成であるから、「まえがき」をもふくめて、全体が、語りの上からは、三部仕立てとなっている。まず純客観の視点とそれから純主観、ついで半客観、半主観ともいうのか、いく分の距離は保ちつつ、主人公に即して、たどり、描いてゆく。この三段構成は、読者を無理なく作中のドラマに導き入れる上で、見事な効果をあげているのではあるまいか。

と、『沈黙』の作品構成を〈三段構成〉と捉えている。上総英郎は「見出された基督『沈黙』」（『遠藤周作論』昭和六十二年十一月二十日、春秋社）で、この佐伯彰一の論について、

この「三段構成」については、終末近く「オランダ商館員ヨナセンの日記」と付加のかたちで「切支丹屋敷役人日記」の二つの記録が挿入されている以上、単純な三段構成とは言い難いが、読者を引き入れる技巧として見事であることは佐伯氏の意見通りである。

と述べる。さらに笠井秋生も、『沈黙』——父の宗教から母の

宗教への転換」(『遠藤周作論』昭和六十二年十一月二十五日、双文社出版)で、

『沈黙』(新潮社、昭和41・3)は、日本におけるキリシタン迫害の状況と主人公ロドリゴの日本潜伏の目的とを記した「まえがき」、ロドリゴの日本潜伏から踏絵に至る経過を描いたいわば本文ともいべき「一章から九章」、踏絵後のロドリゴの生涯を役人の日記によって垣間見せる「切支丹屋敷役人日記」の三部構成からなる歴史小説である。

と、『沈黙』を、佐伯彰一とは分類の仕方は異なるが、やはり、三部構成と解釈している。また広石廉二は『遠藤周作文学全集6』(昭和五十年二月二十日、新潮社)の「付録・第六巻解説」で、『沈黙』の作品構成を「まえがき」、「セバスチャン・ロドリゴの書簡」、「客観描写」、「長崎出島オランダ商館員ヨナセンの日記」、「初切支丹屋敷役人日記」の五つに分けている。しかし『沈黙』は、「まえがき」、そして「セバスチャン・ロドリゴの書簡」と称される「I」「II」「III」「IV」と、三人称描写による「V」「VI」「VII」「VIII」「IX」及び「切支丹屋敷役人日記」の四つに大別するべきであろう。まず、佐伯彰一は『沈黙』の構成を「三部仕立て」、〈三段構成〉と指摘しているが、「切支丹屋敷役人日記」のことについては触れておらず、どこに含まれるのか論じ

ていない。上総英郎は、佐伯彰一の意見について、「オランダ商館員ヨナセンの日記」や「切支丹屋敷役人日記」を取り上げて疑問を呈しているが、上総英郎自身が構成の上でどのように分けるかを明確に述べていない。次に笠井秋生は佐伯彰一とは違う意味で〈三部構成〉と述べ〈「一章から九章」を一つのまとまりとして考えている。しかし、笠井秋生がいう〈「一章から九章」の「I」「II」「III」「IV」は「セバスチャン・ロドリゴの書簡」と書かれており、何も付記されていない「V」「VI」「VII」「VIII」「IX」とは分けるべきであろう。最後に、広石廉二は、「長崎出島オランダ商館員ヨナセンの日記」を独立させて考えているようだが、これは「IX」の中に含まれていて、「長崎出島オランダ商館員ヨナセンの日記」よりとなっており、箇条書きになってはいるが客観描写の形式はかわらず、その後にも同じ調子の本文が続くことから、三人称描写の中に含んで良いものと考えられる。よって、やはり四部構成と捉える方が妥当である。

以上『沈黙』の構成について触れてみたが、なかでも「まえがき」については考察する必要があるだろう。

「まえがき」は、〈ローマ教会に一つの報告がもたらされた〉という簡潔な一文から始まり、当時の日本におけるキリシタン弾圧の状況が説明されている。一五〇〇年代後半、豊臣秀吉が

「まえがき」は、〈ローマ教会に一つの報告がもたらされた〉という簡潔な一文から始まり、当時の日本におけるキリシタン弾圧の状況が説明されている。一五〇〇年代後半、豊臣秀吉が

キリスト教を迫害したのち、徳川家康もまた同じようにキリスト教を迫害した。その当時の日本の情勢が第三者によって語られる形式となっている。

このゴアで彼等は本国にいるよりもっと詳しく日本の情勢を聞くことができた。それによると、三人の出発した年の一月から、日本では三万五千人の切支丹たちが一揆を起し、島原を中心にして幕府軍と悪戦苦闘した結果、老若男女、一人残らず虐殺されたとのことである。そしてこの戦争の結果、この地方はほとんど人影をみぬほど荒廃した上、残存の基督教徒が虱つぶしに追及されているそうである。のみならずロドリゴ神父たちに最も打撃を与えたニュースは、この戦争の結果、日本は彼等の国であるポルトガルと全く通商、交易を断絶し、すべてのポルトガル船の渡航を禁止したとのことであった。(傍線部、引用者)

「日本では三万五千人の切支丹たちが一揆を起し、島原を中心にして幕府軍と悪戦苦闘した結果、老若男女、一人残らず虐殺された」とは島原の乱のことであろう。「まえがき」では、この島原の乱以後の日本の況を語っているのである。島原の乱は、一六三七年に肥前島原藩と同国唐津藩の飛地肥後天草の農民が、益田時貞(天草四郎)を首領としてキリスト教信仰を旗

印として起した百姓一揆のことである。ここで少し注目したいのは引用の傍線部であるが、初版単行本では、引用したように〈三人の出発した年の一月〉とある。しかし、『遠藤周作文学全集6』(昭和五十年二月二十日、新潮社)では、傍線部の〈三人の出発した年の一月〉は〈三人の出発した前の年の十月〉と書き直されている。〈三人〉とは、ロドリゴ、ガルペ、サンタ・マルタの三人のことであるが、一六三八年三月二十五日、三人を乗せたインド艦隊はベレム要塞の祝砲をうけながらタヨ河口から出発したとあるから、〈三人〉が出発したのは、〈一六三八年〉のことである。つまり初版では島原の乱が起きたのが、〈一六三八年〉の〈一月〉になつていたのである。遠藤周作はこの誤りに気付き、『遠藤周作文学全集6』(昭和五十年二月二十日、新潮社)で〈三人の出発した前の年の十月〉と書き直したのである。そうしたことによって、作品中の歴史に基づく年代矛盾が消滅したのである。

さて、「まえがき」に書かれていることの一つは、〈稀にみる神学的才能に恵まれ、迫害下にも上方地方に潜伏しながら宣教を続けてきた教父〉であるクリストヴァン・フェレイラが〈棄教〉したということ、二つ目はそのフェレイラの〈棄教〉の真相を確かめるためにロドリゴ、ガルペ、サンタ・マルタたちが

日本へ渡航したということ、である。三つ目に描かれているのは、その当時の長崎奉行である竹中采女によるキリスト教信者たちの弾圧の実態である。フェレイラの手紙によると、竹中采女は雲仙の熱湯で神父たちを拷問したというが、〈キリストの英雄たちは、身動き一つせずこの怖ろしい苦痛に耐え〉、〈役人が凶暴になればなるほど〉〈ひるまなかつた〉という。さらに、

遂に采女はいかにしても自分が勝てないことを悟った。

かえって部下から、神父たちの勇氣と力を見れば、これを改心させるよりも雲仙のあらゆる泉と池はつきてしまいうだらうという報告を受けとつたので、神父たちを長崎に連れもどすことに決心した。

と、ローマ教会にキリスト教神父たちの信念が伝えられている。他の神父たちは残虐な竹中采女の拷問にもひるまず棄教しないで殉教していく中、〈日本にいること二十数年、地区^{スベリオ}長という最高の重職にあり、司祭と信徒を統率してきた長老〉であるフェレイラが殉教しないで棄教したというのである。また、藤田尚子『沈黙』草稿・翻刻』掲載の「遠藤周作自筆草稿①」には次のような箇所がある。『沈黙』初版本では「まえがき」にあたる部分である。

「その上、日本には、我々にとって、まこと怖い男が一

人いる。我々がようやく知りえたかぎりの知識によると、この《悪魔のような男》名はイノウエという。」井上という名を二人が耳にしたのは、この時であった。ヴァリニャー師は、彼のことを悪魔のような男と〈よ〉んだ。なぜなら、さきに切支丹迫害の最も残忍にして兇暴な手先といわれたタケナカ・ウネメでさえ棄教させえなかつた日本切支丹たちを次から次へと「ころばせ」たのはこの井上だということとを老神父は知っていたからである。

「《この〈イノウエ〉井上は若い頃は洗礼〈を〉さえ、受け〈て、後に神を棄てた〉た男である。しか〈も〉し今〈この井上は〉、我々は井上の手によって、我々がもつとも信じていた信〈者〉を徒でさえ、〈彼は同じように背教させる力を持つているのだ。〉《彼と同じように神を裏切らされた》ことを最後の通信で《学んだ》のだ。そしてもし……」それから彼は口を噤んで言いかけようとした言葉をやめた。

「〈そして、もし……〉フェレイラ師ですか。」と喘ぐようにマルタ神父がたずねた。

「その井上の手で……」

ヴァリニャー神父は何も返事をせず椅子から立ちあがって

窓の方に背をむけた。三人はその《歪んだ小さな》背がまるで《子供》のように震え、今にも泣きだしそうなを感じた。

以上引用した本文の前には、ヴァリニャーノ師によってフェレイラが不明であること等が語られている。このあたりの本文は初版本と「遠藤周作自筆草稿①」とを比較するとかなりの異同があるが、引用の部分は初版本では削除され、次のような文章に変わっている。

ヴァリニャーノ師は三人が日本上陸後探そうとしているフェレイラについても次のように説明した。一六三三年来、潜伏宣教師たちからの通信も全く途絶えてしまった。

フェレイラが捕らえられたということ、長崎で穴吊りの拷問を受けたことは長崎から澳門に戻ったオランダ船員から聞いてはいるが、その後の消息は不明であり、それを調査することもできぬ、なぜなら問題のオランダ船はフェレイラが穴吊りに会ったその日に出帆したからである。当地でわかっているのは新しく宗門奉行に任命された井上筑後守がフェレイラを訊問したということだけである。いずれにしろ、こうした状況にある日本に渡ることが、澳門の布教会としては、とても賛成できぬ。これがヴァリニャーノ師

の率直な意見であった。

今日、我々はポルトガルの「海外領土史研究所」に所蔵された文書の中にこのセバスチャン・ロドリゴの書簡を幾つか、読むことができるが、その最初のもは以上書いたように、彼と二人の同僚がヴァリニャーノ師から日本の情勢を聞いたところから始まっている。

このように、語りの上で、「遠藤周作自筆草稿①」では、普通の三人称描写になっているが、初版本では、読み手側に近いより客観的な視点になっている。そして重要なのは、この「まえがき」の一部にあたる「遠藤周作自筆草稿①」においては井上筑後守の一通りの説明がなされているのに対して、初版本では「まえがき」に井上筑後守は〈新しく宗門奉行に任命された〉人物ということだけが書かれ、かつてキリスト教信者であったことなどは、のちに作品内で語られることとなる。フェレイラについても棄教後の消息が分からないのは勿論のこと、分かっているのは、井上筑後守に訊問されたということだけという設定になっているのである。ここで読者は、なぜフェレイラのような教父が棄教したか、またどのような理由で棄教したのか、〈碧い澄んだ眼とやわらかな光をたたえた〉フェレイラを棄教させた井上筑後守とはどういう人物なのか、といった点に興味

を持ち、作品の中に引き込まれていくわけである。遠藤周作は「まえがき」で井上筑後守とフェレイラについて語るのを避け、より読者の関心を惹こうとしたのである。遠藤周作はそのような効果を期待して初めは「まえがき」に書いていた井上筑後守とフェレイラにおける説明を削除し、のちの作品内にちりばめたのではあるまいか。ともあれ、フェレイラが棄教したことに、井上筑後守が大きく関係しているということは、この「まえがき」で顕著に語られているのである。この異同から考えてみても井上筑後守が「まえがき」から登場し、『沈黙』において重要な人物であることが容易に推測できよう。

以上述べたように、「まえがき」には作品の軸となる、主人公であるロドリゴたちが日本へ向かうことになった要因が書かれている。そして、フェレイラの棄教の真相を追究することこそが『沈黙』の主題である。この「まえがき」は作品にとって、導入という意味だけでなく、作品のクライマックスにつながる伏線が敷かれている重要な部分なのである。しかし、その『沈黙』の主題となるフェレイラの棄教の鍵をにぎると推測される井上筑後守について言及した論文は管見による限り見当たらない。ロドリゴたちが日本へ向かう理由となったフェレイラの棄教に係る人物である井上筑後守を、当然のことながら考察

しなければならぬであろう。それが、本稿の一つの目的である。

三、『沈黙』の主要人物

『沈黙』の重要な人物として多くの研究者に論じられてきたのは、主人公であるロドリゴと、キチジローである。しかし私は、ロドリゴとキチジロー以外に井上筑後守を重要な人物として考える。井上筑後守は作品ではほとんど描かれていないが、主人公と同様に『沈黙』において主題に関わる人物であろう。

井上筑後守については後で触れることにして、まずはロドリゴとキチジローについて考察したい。

キチジローが登場するのは「I」からで、ロドリゴたちが初めて出会った日本人である。キチジローは、二十八か九歳で〈長崎にちかいヒゼン地方の漁夫〉だという設定である。キチジローは、八年前に一家に恨みをもった者に密告され切支丹として取調べを受け、その兄妹は殉教したというのに、このキチジローだけは棄教したらしいのである。ロドリゴたちが出会った当初、キチジローは自分が切支丹であることを隠していたのだが、それは、ロドリゴたちが捕らわれた時、自分が切支丹で

あることを役人に密告されることを恐れる弱さのためであろうと、ロドリゴは推測した。結局ロドリゴたちは日本に到着した際の案内人としてキチジローを雇うことにする。さて、そのような人物であるキチジローはどのように論じられてきたのであろうか。

武田友寿は、「『沈黙』の世界―弱者の論理―」（『遠藤周作の世界』昭和四十六年七月二十日、講談社）で「『沈黙』の中心人物はキチジローである」とした上で、キチジローのことを「貧相で狡猾で、脆弱な意志の持ち主」と述べる。上総英郎は「見出された基督『沈黙』」（『遠藤周作論』昭和六十二年十一月二十日、春秋社）で、キチジローを「やりきれない煩わしさを感じさせるこの土民」という。また池内輝雄は「『沈黙』の方法―『深い河への行程』」（『国文学解釈と教材の研究』平成五年十月号）で、キチジローの性格を「軽蔑すべき性格」として、「弱虫の卑怯さ」と表現している。さらに高橋英夫は「神とシンクレティズム―遠藤周作『沈黙』について」（『清和女子短期大学紀要』平成十四年一月）で、キチジローを「卑屈さ、狡猾さ、抜け目のなさの塊のようなこの男」と形容している。どうしてキチジローはこのような捉われ方をされてしまうのだろうか。ロドリゴが初めてキチジローに出会った時の描写は次のよう

であった。

生れて初めて会った日本人についてどうお話したらいいでしょう。よろめくようにして一人の酔っぱらいが部屋に入ってきました。襦袢をまとったこの男の名はキチジローと言います。年齢は二十八か九歳くらいでした。我々の問いに漸く答えたところによりますと、長崎に近いヒゼン地方の漁夫だそうで、あの島原の内乱の前に海を漂流していた時、ポルトガル船に助けられたのだそうです。酔っているくせに狡そうな眼をした男でした。私たちの会話中、時々、眼をそらしてしまうのです。

ロドリゴは、キチジローの見た目を「襦袢をまとった」と不潔なイメージを持ち、「狡そうな眼をした男」という先入観を持っている。さらに、「I」「II」「III」「IV」の「セバスチャン・ロドリゴの書簡」には、キチジローの代名詞、キチジローを形容することばとして、例えば次のようなことばが使われている（引用はすべて初版、頁も初版を使用する。なお傍線は引用者による）。

I	23	章 頁 描写
		その態度は基督教的な忍耐の徳などはほど遠い、あの弱虫の卑怯さというやつでした。

IV	IV	IV	IV	IV	III	III	III	II	II	II	II
96	94	92	68	66	54	52	50	29	29	29	28
うか。 乞食のようなこの男には三百枚の銀はどんなにまぶしい誘惑だろ	キチジローは野良犬のように間隔をおいてついでにきました。	聲音がきこえ、あの男のよごれた、鼠のように小さな眼がむこうの岩の間からこちらを覗いていました。	二人のうしろでキチジローは主人に撲られた犬のように哀しそうな眼で私たちを恨めしそうに見ていました。	今となると臆病で気の弱いこの男は、私たちをここまで送ってきたために事件に巻き込まれ、困惑しきっていたのでした。彼は信徒としての自分の面目をたもち、しかも自分が助かる方法を小さな頭で懸命に考えているようでした。狡そうな眼を光らせ手を蠅のようにこすりながら、五島にもやがては同じような探索がのびるにちがいない。だからこの浜辺よりも、もっと遠い地方に行かれた方がいいなどと言いだすのでした。	キチジローはそういう時、叩かれた犬のようにしゃがんで自分の頭を手で打ちます。性来、弱虫男には、勇氣というものがどうしても持てなかつたのです。	病そうな笑いを久しぶりで見つけました。	私は待っていた三人の漁夫たちの顔の中にキチジローの卑しい臆病そうな笑いを久しぶりで見つけました。	まるで鼠のように何かあれば、いつでも逃げ出せるような姿です。	野良犬のように泥だらけになった彼の顔は兄妹の殉教を見ることさえできず、すぐ消え去ってしまったというのです。	おそろく私の想像では、この臆病者は日本に戻った時、我々の口から彼が基督教徒であることを役人たちに洩らされるのを怖れているのではないかと思えます。	信仰は決して一人の人間をこのような弱虫で卑怯なものにする筈はない。

IV	IV	IV
103	101	100
見えませんでした。蜥蜴のように怯えた眼をしたその顔が……。	一度後をふりむくと私を裏切ったキチジローの小さな顔が遠くにうな眼をして後ずさりをしました。	竹筒をぶらさげてキチジローはだらしなく足を曳きずってきました。私にきびしい非難をうけたと思つたらしく、彼は叩かれた犬のよう

以上は「I」「II」「III」「IV」におけるキチジローの描写及び形容の大部分である。このようにキチジローは意識的に、不潔で、弱虫、臆病者と何度も書かれている。しかし忘れてはならないのは、「I」「II」「III」「IV」は「セバスチャン・ロドリゴの書簡」だということである。「書簡」ということは、ロドリゴの主観なイメージということになる。つまりロドリゴはキチジローに出会った当初からずっと、キチジローのことをこのように見下しているのである。ロドリゴから見ると、キチジローは「ある決定的な思い出が心の奥にあつて、それを忘れるために酒を飲んでいよう」ように思われるというのに、その理由については全く理解しようとしていない。また「狡そうな眼」と印象だけでキチジローを判断しているのである。どうして襤褸を着ているのか、日本を脱出し、言語も不自由で異国で知り合いがいるわけでもなく、金銭があるわけでもない者が一人で生活するということはどういう苦難な状況におかれているか。それを

ロドリゴは認識せず、放浪しているキチジローに、ロドリゴはただただ軽蔑の目を向けるだけである。そこには貧しく弱い人間に対する思いやりや人間同士の触れ合いなど微塵も見当たらない。特に「II」の28頁の〈この弱虫は嵐の間、ほとんど水夫たちを手伝うことさえせず、荷と荷との間に真蒼になつて震えていました。〉という箇所は、日本に向かう船の中で、キチジローが船酔いしている場面である。水夫のように船に乗り慣れていないキチジローが船酔いしてしまうというのは、仕方のないことである。その苦しんでいるキチジローに対して、いたわりの感情を持つどころか、〈弱虫〉と捉えている。このようにロドリゴは、苦しんでいる者、弱者に対する優しさに欠けている。司祭という立場にあり、本来ならば神に救いを求める弱い人間である信徒たちを教え導き、救わなければならない立場にあるロドリゴが、このキチジローに対しては人間的な触れ合いを持つとうとする意思や理解しようという気持がなく、外面的な容貌で人間性の善悪を判断している。「V」以降にも、いくつかキチジローの描写が出てくるが、ロドリゴの視点からのキチジローの形容はやはり〈だらしなく〉や、〈怯えた〉といった表現が使われている。しかし、「V」以降でキチジローの代名詞として〈弱虫〉、〈臆病者〉といったことばが使われていないのは、語り手

がロドリゴではない為であろう。

また、ロドリゴとキチジローの関係は、『沈黙』の刊行当時から今日まで、キリストとユダとの関係と重ねて論じられることが多かった。例えば、玉置邦雄は『沈黙』の世界―母性的救いの神への希求―（『日本文芸研究』昭和四十四年十二月号）で、〈ロドリゴは自己とキチジローとの関係の上に、主イエスと背教者ユダとの関係を重ね合わせていることに注目したい〉と述べ、武田友寿は『沈黙』の世界―弱者の論理―（『遠藤周作の世界』昭和四十六年七月二十四日、講談社）で、〈ロドリゴは自分のこの奇怪な運命をキリストになぞらえ、〈作者遠藤はユダとキチジローを同種の間人として描こうとしている〉と指摘する。また高橋英夫は「神とシンクレティズム―遠藤周作『沈黙』について」（前出）で、〈言うまでもなく、二人の関係においてキチジローがユダならば、ロドリゴはキリストである〉と論じている。しかしながら、前に引用したロドリゴのキチジローに対する態度をつぶさに考察すれば、ロドリゴは決してキリストではないことが明白に読み取れるであろう。ロドリゴがキリストとでないとするれば、キチジローは当然のごとくユダではないのである。以上の論考のように、ロドリゴとキチジローがキリストやユダの造型であることに視点を置くよりも、この二者

間における人間としての関係を論じることの方が重要なのではないか。

では、ロドリゴはどういう人物であろうか。タスコ町で(注1)生まれたセバスチャン・ロドリゴは、十七歳で修道院に入り、司祭となった。ロドリゴはフェレイラの棄教の真相を確かめるべく日本に渡航したのだが、島原の内乱後、日本は「ポルトガルと全く通商、交易を断絶し、すべてのポルトガル船の渡航を禁止」したのだという。さらに澳門では、ロドリゴたちは、ヴァリニャーノ師から、「日本における布教はもはや絶望的であり」、〈これ以上、危険な方法で宣教師を送ることを澳門の布教会では考えていない〉と聞かされた。ヴァリニャーノ師は〈十年前から日本及び支那に向う宣教師を養成するために布教学院を澳門に建設〉し、〈日本における基督教迫害以来、日本イエズス会管理〉をしていた神父である。また、一六三三年来、潜伏宣教師からの通信も全く途絶えてしまった〉というのである。ロドリゴたちは、このような苛酷な状況でヴァリニャーノ師の反対を押し切って日本へ渡航したのであった。そうまでして日本へ向かったのは、〈碧い澄んだ眼とやわらかな光をたたえた〉フェレイラの〈存在と運命〉を確かめたかったからである。ヴァリニャーノ師は、ロドリゴたちの〈(特に同僚ガルペの)〉熱意に

負けて日本への密航を許可したのだった。命の危険を承知の上で、このような状況のもとで異国へ向かうということは、並大抵の信念で出来ることではない。ここからロドリゴの信仰に対する熱意を窺い知ることができるのである。しかし、日本へ渡ってから、村人三人が捕らえられた際、先に述べたロドリゴの信仰の在り方に疑問を抱かざるを得ない場面が出てくる。なんとか日本へ辿り着き、トモギ村の信者でかくまわれていたロドリゴとガルペであったが、そのうち役人たちの手が及んでしまふ。何度かトモギ村を詮索した武士は、のちに村人から三人程、長崎に出頭せよと命じた。トモギ村では、誰が出頭するかという話合いが行われたが、まず、キチジローが候補に挙がった。〈他村者〉である為、厳しい詮議もされないだろうという理由からである。キチジローは村人たちに頼まれ、〈混乱して泪ぐむとみなを罵りだし〉たが、結局、〈気の弱さ〉の為か、断ることができない。続いて、自ら名乗り出たのが、イチゾウとモキチである。その三人が出頭することとなった。モキチが、出頭後、踏絵を踏まされることを推測し、自分が踏絵に足をかけなければ村の者全員が取り調べを受けることになるという事態にどう対処して良いか分からず、ロドリゴたちに助けを求める場面で次のような描写がある。

憐憫の情が胸を突きあげ、思わず私はおそらくあなたたちなら決して口にしない返事を言ってしまった。かつて雲仙の迫害でガブリエル師は日本人から踏絵をつきつけられた時、「それを踏むよりはこの足を切った方がましだ」と言われた話が頭をかすめました。あまたの日本人の信者とパードレが同じ気持で自分の足の前に差いだされた聖像画にむきあつたことを知っていました。しかしそれをどうしてこの可哀想な三人に要求することができたでしょうか。

「踏んでもいい、踏んでもいい」

そう叫んだあと、私は自分が司祭として口に出してはならぬことを言ったことに気がつきました。ガルペが咎めるように私を見つめていました。

熱心な司祭であるロドリゴが、このように、助かるためなら踏絵を「踏んでもいい」と答えるのである。ロドリゴは信仰に對して熱心ではあるが、決して信念、信仰に凝り固まっている鉄のような人間ではない。このように、置かれている状況を冷静に判断できず、またその考えが有効であるかなどを考慮せず（憐憫の情が胸が突きあげ）、（思わず）「踏んでもいい、踏んでもいい」と言うのである。そして、こういう甘さが、のちに転んでしまう要因の一つになっているのだらう。ここで藤田尚

子の『沈黙』草稿・翻刻』に掲載されている草稿におけるこの箇所について触れてみたい。草稿ではこの場面は次のようになっている。

私はその時、どういう返事をしたのか。そうです。私は思わずおそらくあなたたちならば決して口に出しはしなかつた返事を言ってしまった。（かつてウンゼンの迫害でカルヴァリヨ師は）突如カルヴァリヨ師が日本人から踏絵をつきつけられた時「それを踏むよりはこの足を切った方がましだ」と言われた話が私の頭をかすめました。あまたの日本人の信者とパードレが同じ気持で自分の足の前に差いだされた聖像画にむきあつたことを知っていました。しかしそれをどうして、この可哀想な三人に要求することが私にできたでしょうか。

「踏みなさい。」私はモキチの眼をじっと見つめて答えました。「踏絵を踏みなさい。」同僚のガルペも私のこの返事に大きくうなづいてくれました。

「基督がもしこゝにいられたら……同じ返事ををされたらう。」

ここで注目しなければならぬのは、（踏絵を踏みなさい。）と言つたロドリゴに対して（同僚のガルペも私のこの返事に大

きくうなづいてくれました。』というところである。これは、単行本では「ガルペが咎めるように私を見つめていました。」と訂正されている。ガルペはロドリゴと別れたのち、役人たちに捕らえられ、既に踏絵に足をかけた百姓たち三人と入江に連れていかれる。ガルペ自身が転ばなければ、百姓たちの命はない。しかしガルペは転ばず、殉教する。つまり、ガルペは自己の信仰を選んだのである。もし、草稿にあるように、ガルペが、命が危険にさらされた時は踏絵を「踏んでもいい」と思うような人間であつたなら、殉教せず、百姓たちを救うために自ら踏絵を踏んだであろう。単行本では、ガルペの人物像はこのように変えられ、ロドリゴとガルペは対照的に描かれているのである。加えて言うなら、引用の箇所、のちにロドリゴとガルペの二人がどういふ結末になるかということが推測できる。この引用の部分は、最後にはロドリゴが転んでしまうのではないかと想起させる重要な伏線となっているのである。

さて、先にあげたキチジロー、イチゾウ、モキチは、出頭後、踏絵にかけられることとなった。三人はロドリゴに言われたように踏絵を踏んだ。しかしながら、取り調べは踏絵だけではなかつた。三人が踏絵を踏んだあと、役人は「踏絵に唾をかけ、聖母は男たちに身を委してきた淫売だと言ってみよ」と命じた

のである。モキチとイチゾウは何もできず、ただキチジローだけが助かるため、命じられるがままにしたのである。この方法は井上筑後守が発明したものらしく、日本における弾圧の厳しさと巧妙な手口は、その心理的方法においてロドリゴの想像をはるかに上回っていたと考えられるのである。ロドリゴはそのような日本における現状認識が浅かつたのだ。先に触れたが、ロドリゴは、キチジローを理解できないのと同様にまた、日本の弾圧の厳しさについても無知であつた。ただ、自己の信念と熱意だけで日本にやってきたロドリゴは、そこに生きて生活している現実世界から遊離した、信仰という観念の世界に生きている人間なのである。日本に来てからのロドリゴたちは、直接、村人の生活の中に入って布教したわけではなかつた。役人たちの目を逃れる為、山の中で隠れて暮らしていたロドリゴの信仰は、直接的には村人の生活から隔離されたものであつた。武士がトモギ村を詮索しに来た時も、ロドリゴは敵である武士と直接戦うことはせず、遠くから村人たち三人が長崎へ行くのを遠くから見ただけである。さらに、キチジローに裏切られ役人に捕らえられてからのロドリゴの生活にもそのような傾向が窺える。ロドリゴは役人たちに捕らえられたのち、自身で推測していたように拷問されたわけではなく、それどころかも

てなされたのである。着物と食料も与えられ、それは、ロドリゴが想像していたものとはかけ離れていたのだ。しかし、同じように捕まった日本の信徒たちは肉体的な拷問を受けていたのである。それをロドリゴは捕まった農民たちがどのような身の上にあるのか、少しも心配していない。考えもしていないのである。このように井上筑後守は、ロドリゴの想像を超越した心理的作戦で、司祭たちを転ばせていたのであった。ロドリゴは信仰に対して純粹であるが故に、そこまで考えが及ばなかったのであろう。ロドリゴは日本の現状を把握できないのと同様に、キチジローや農民たちの生活や苦しみも理解できなかったのである。ロドリゴは自分が優遇されていたので、自分と同じように捕えられた農民たちが酷い拷問を受けているとは思ひもしなかった。その現実認識の甘さが、のちにロドリゴが役人に捕えられ、〈真暗な罍い〉に入れられた時、穴吊にされている信徒たちの苦しんでいる〈呻き声〉を安楽に眠っている〈鼾〉と間違えてしまう原因の一つになっているのである。ロドリゴは捕えられた後、〈真暗な罍い〉に入れられ、何度も〈呑気な鼾〉を耳にする。しかしそれは、ロドリゴが思うように〈牢番〉の〈鼾〉ではなかった。

「私はただ、あの鼾を」と司祭は闇の中で答えた。

突然、通辞は驚いたように黙ったが、

「あれを鼾だと。あれをな。きかれたか沢野殿、パードレはあれを鼾と申しておる」

司祭はフェレイラが通辞のうしろに立っているとは知らなかった。

「沢野殿、教えてやるがいい」

ずっと昔、司祭が毎日耳にしたあのフェレイラの声が小さく、哀しくやっと聞こえた。

「あれは、鼾ではない。穴吊りにかけられた信徒たちの呻いている声だ」

この〈呻き声〉を〈鼾〉と間違えていたことをフェレイラから知らされたことよって、ロドリゴは初めて農民たちと自分が乖離していたことを知るのである。そして自分の信仰が観念の世界にだけで成り立っているのであって、それが、現実世界とは隔たっていたことに気がつくのである。加えてそのことこそが、ロドリゴが転んだ最大の要因であろう。

以上、ロドリゴとキチジローの関係について述べたが、続いて井上筑後守について、『沈黙』における信仰の在り方と絡めて思案してみたい。

井上筑後守は、「まえがき」のところで触れたように、フェレ

イラの棄教の鍵を握る重要な人物である。井上筑後守は、ロドリゴの想像に反して「ものわかり良さそうな温和な人物」という設定である。ヴァリニャーノ師の話によると、井上筑後守は〈島原の内乱後、基督教弾圧の事実上の指導者〉となり、〈前任者タケナカとは全く違った蛇のような狡猾さで、巧みな方法を駆使し〉、〈それまでは拷問や脅しにもひるまなかつた信徒たちを、次々と棄教させている〉という。さらにかつてはキリスト教の信者であり、洗礼まで受けたというのである。

遠藤周作は『沈黙の声』（平成四年七月十一日、プレジデント社）で井上筑後守について次のように語っている。

井上筑後守はいちどキリスト教徒になり、そしてキリスト教を棄てた男だった。しかも彼は大インテリであり、戦を経験せずに大名になった、徳川時代最初の官僚だった。おそらく彼ほどの優秀な頭脳を持った男なら、自分がキリスト教徒になるときも棄てるときもいろいろ考えたはずである。だからこそ最後に彼はロドリゴに向かって言う。おまえは日本という泥沼に敗れたのだ。この国は切支丹の教えにはむかない。切支丹の教えは根をおろさない。日本とはそうした国だ。どうにもならない……。

遠藤周作自身、このように言っているにも拘らず、井上筑後

守がどうしてキリスト教に帰依し、洗礼まで受けたか、さらになぜ〈基督教弾圧の事実上の指導者〉になるに至ったかは作品内において全く書かれていない。井上筑後守は権力者であるので、当然のことながら拷問で転んだわけではない。「V」から登場する通辞の場合と比較して考えると、通辞は〈地侍の息子〉で出世の為、キリスト教に帰依し洗礼まで受けて、神学校でポルトガル語を習得したのである。だが、〈修道士になる志〉も〈切支丹になる志〉も持ち合わせていないという。つまり通辞は自己の出世の為だけにポルトガル語を習得する手段としてキリスト教を利用したのである。それに対して井上筑後守は、自分の意思でキリスト教を信仰したり棄てたりしたのであるが、井上筑後守にとって信仰とはどのようなものであったのか、全く推測できないのである。

『沈黙』には様々な弾圧による殉教と棄教の形が描かれている。「おまえがき」で登場した信徒たちやロドリゴの同僚ガルペのように、棄教せずに殉教していく者、キチジローのように幾度転んでも、信仰を棄てきれずに再び信徒になろうとする者、ロドリゴやフェレイラのように転んだのち違った形で生活を続ける者、通辞のように自己の出世に使う語学を習うためだけに信者となった者、などである。しかし『沈黙』の重要な人物で

ある井上筑後守の信仰の在り方や棄教に至る内面的な経過だけが謎に包まれたままなのである。このように遠藤周作は、『沈黙』の主題に大きく関わり、フェレイラの棄教に関係する、井上筑後守の信仰の実態を描いていない。その部分を遠藤周作は、先に引用したように、

おまえは日本という泥沼に敗れたのだ。この国は切支丹の教えにはむかない。切支丹の教えは根をおろさない。日本とはそうした国だ。どうにもならない……。

という形だけで処理してしまったのである。〈日本とはそうした国だ〉という〈そうした国〉の具体的な内容が少しも明らかにされていない。遠藤周作は、かつては信者でありながら、権力そのものであり、積極的に信者を弾圧する側になった井上筑後守の精神構造を具象的に描かねばならなかったのである。遠藤周作自身が〈彼ほどの優秀な頭脳を持った男なら、自分がキリスト教徒になるときも棄てるときもいろいろ考えたはずである〉と自注する井上筑後守がどのように〈いろいろ考えた〉のか、その井上筑後守を立体的に描くことによって初めて〈日本とはそうした国だ〉という言葉の真意が浮かび上がってくるのである。そのような井上筑後守の内面を描けば、『沈黙』は口ドリゴやフェレイラ、キチジロー、通辞とは違った信仰の在り

方、転び方について追究した、より奥深い作品になったであろう。

(注)

1、初版本ではセバスチャン・ロドリゴの生年は一六一〇年になっているが、『遠藤周作文学全集』(昭和五十年二月二十日、新潮社)以降は、生年は明記されず、削除されている。

(たなか あおい／本学大学院生)